

聖書：創世記 29：31～30：24

説教題：ヤコブの子どもたちの誕生

日時：2024年2月18日（朝拝）

ヤコブはラバンの家で二人の娘と結婚することになりました。ヤコブは下の娘のラケルとの結婚を望んで7年間、ラバンの下で働きましたが、約束の日が満ちて彼に与えられたのは何と姉のレアでした！かつてヤコブは父イサクをだまして兄の祝福を横取りしましたが、自分が他の人をだましたように自分もだまされることとなりました。ラバンは下の娘ラケルとの結婚も許しますが、そのためにヤコブはもう7年間働かなければならなくなりました。この条件を呑むことによってヤコブは二人の妻を持つことになったのです。もちろんこれは正しいあり方ではありません。創世記2章に記されている最初の結婚で神はアダムに一人の妻エバを連れて来たように、神の御心は言うまでもなく一夫一婦制です。しかしヤコブはラケルとの結婚を願っていました。そのためにラバンの下で仕えて来ました。そのため、彼が願ったことでは全くありませんでしたが、結果的に二人の妻を持つことになってしまったのです。そしてここからさらに恐ろしい状況が発生したことが今日の箇所にも記されています。すなわち二人の妻が夫の愛を巡って出産競争をし、家庭内に一層の混乱が生じることとなったのです。

まず出産したのは姉のレアでした。31節に「主はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれた」とあります。ヤコブは妹のラケルが好きでした。姉のレアは愛されていませんでした。むしろ嫌われていました。同じ妻の立場にあるのに、こうであることは彼女にとってとてもつらいことです。そんな彼女を主は顧みてくださいました。ここに聖書の神がどんな方であるかが示されています。ラバンの指図によるとは言え、ヤコブを欺いた責任はレアにもあったと言えるかもしれません。彼女としてはとにかく結婚してしまえば、あとは何とかなると考えていたかもしれません。しかしヤコブはあからさまにラケルだけを愛して、自分のことは愛してくれません。自分はただ形式的に妻の立場に収まっているだけです。これはある意味で自分の行動が引き起こした苦しみと言えます。しかし主は彼女が嫌われているのを見て彼女を顧みてくださいました。これはレアと同じように自分で自分の状況をどうすることもできない苦しみの中にある者にとっての慰めです。人は嫌っても神は嫌わずに私を見てくださり、憐れみの手を伸ばしてくださるお方です。

レアは身ごもって男の子を産み、その子をルベンと名づけました。「主は私の悩みをご覧になった。今こそ夫は私を愛するでしょう」と彼女が言ったからであるとあります。ルベンという言葉には印がついていて、欄外を見ると「子を見よ」の意であるとあります。これは誰に対する言葉でしょうか。ヤコブへの言葉でしょうか。つまり、この子を見て！そして私を愛して！という意味だったのかもしれませんが。レアは続けて二人目の子を産み、シメオンと名づけます。シメオンとは「聞く」という意味です。「主は私が嫌われているのを聞いて、この子も私に授けてくださった」と彼女は言いました。さらに三番目にレビを産みました。こちらは「結ぶ」という意味で「今度こそ、夫は私に結び付くでしょう」と彼女は期待しました。そしてもう一人、四番目のユダも産みました。こちらは「ほめたたえる」という意味です。後に明らかになるように、約束の救い主はこのユダから出ます。ヤコブが愛したラケルではなく、ヤコブに愛されていなかったレアから救い主メシヤは出るのです。レアは神の憐みによってこの光栄にあずかる者とされたのです。

さて立て続けに四人も出産した姉を見て妹のラケルは嫉妬します。彼女はきっと小さい時から「可愛い、姉より可愛い」と言われて育って来たでしょう。またこの時も夫に愛されている喜びに生きていたでしょう。しかし姉は次々に男の子を産むのに自分にはそのことが起こらない。そこでヤコブにこのように言ったと 30 章 1 節にあります。「私に子どもを下さい。でなければ、私は死にます。」これに対してヤコブはどう言ったのでしょうか。2 節に、ヤコブはラケルに怒りを燃やしてこう言ったとあります。「私が神に代われるというのか。胎の実をおまえに宿らせないのは神なのだ。」確かにこれは神学的には正しい言葉です。子を与えてくださるのは神です。しかし他に適切な対応の仕方はなかったのでしょうか。一代前の父イサクどうだったでしょう。25 章 21 節に「イサクは自分の妻のために主に祈った」とありました。イサクは 20 年間も妻のために祈りました。ところがヤコブには祈りが見られません。また悩みの内にあるラケルを慰める他の言葉もあったでしょうに彼は怒って先の言葉を返すだけでした。そこでラケルは女奴隷を通して子を得ようとします。この方法で思い起こすことは何でしょうか。それはアブラハムの妻サラもなかなか子が与えられないため、女奴隷ハガルを通して子を得ようとしたことです。しかしあの結果はどうだったでしょう。子を得た喜びも束の間、家の中に恐ろしい争いが生じ、結局女奴隷とその子を追い出すことになりました。その先例から学ぶなら同じことを繰り返すべきではなか

ったのではないのでしょうか。しかしラケルはとにかく自分の子を持ちたいと必死で、女奴隷ビルハをヤコブのところに連れて来ます。ヤコブはここで異を唱えることもできたはずですが、言われるままに従います。その結果、ビルハは身ごもり、男の子を産みました。ラケルはその子をダンと名づけます。これは「さばく」という意味です。彼女は「神が私のために正しいさばきを行い、私をかばってくださった」と言いました。ビルハは再び身ごもり、二人目の男の子を産みました。その子をラケルはナフタリと名づけました。これは「争う」という意味です。彼女は「私は姉と死に物狂いの争いをして、ついに勝った」と言います。彼女は姉を競争相手としてしか見ていません。これまでのところ 4 対 2 とまだ後れを取っているにもかかわらず、これで勝った！と勝利宣言をして自分を保っています。

これを見て姉のレアも静かにしてられません。彼女も妹と同じく女奴隷を通して自分の子を増やそうと図ります。彼女の女奴隷ジルパは男の子を産み、レアは「ガド」と名づけました。これは「幸運」という意味です。私に幸運が回って来た！と彼女は言います。さらにジルパは二人目の子を産みます。レアはその子をアシェルと名づけました。「幸せと思う」という意味です。妹が「ついに私が勝った！」と言えば、姉は「私の方こそ、人々から幸せ者と思われている！」と応戦します。まさにプライドと意地をかけた勝負です。

そんな中、もう一つのエピソードが 14 節以降にあります。レアの息子、長男のルベンが野で恋なすびを見つけて来ました。これは一体何でしょうか。これは古代に媚薬として使われていたものようです。聖書では他に雅歌 7 章 13 節に出て来ます。そこに「恋なすびは香りを放ち、私たちの門のそばには、すべての最上の果物があります」とあります。これは独特の香りを放ち、生殖能力を刺激し、豊穰をもたらすものと考えられていたようです。ラケルはそれを少し私にくださいと言います。姉のレアは「あなたは私の夫を取っても、まだ足りないのですか。私の息子の恋なすびまで取り上げようとするのですか」と答えます。するとラケルは「では、あなたの息子の恋なすびと引き替えに、今夜、あの人にあなたと一緒に寝てもらいます」と言います。どうやらラケルが愛されている第一の妻として誰がヤコブと寝るか決める特権を持っていたようで、ラケルは交換条件で恋なすびを手にし、そこで野から帰って来たヤコブを出迎えてレアは言います。「あなたは私のところに来ることになっています。私は、息子の恋なすびで、あなたをようやく手に入れたのですから」と。ヤコブ

は要求されるまま行動します。ただただ受動的で、リーダーシップを発揮していません。その結果、レアが再び身ごもります。恋なすびを手にしたラケルではなく、それを手放したレアが身ごもります。子を与えるのは恋なすびではなく、主であることが暗示されています。レアは5番目の子に「報酬を与える」という意味のイッサカルという名をつけ、次に生まれた6番目の子には「ともに住むでしょう」という意味のゼブルンという名をつけます。さらにレアは女の子ディナを産んだことも記されています。彼女は後の34章の出来事に関わる人としてここに名が記されていると考えられます。

そんな中、ついにラケルの胎が開かれたことが22節以降に記されます。神はラケルに心を留められました。「神は彼女の願いを聞き入れて」とありますから、ラケルも神に必死に祈ったということなのでしょう。彼女は生まれた子をヨセフと名づけます。これは「加える」という意味です。「主が男の子をもう一人、私に加えてくださるよう」と彼女は言いました。ラケルは恋なすびが功を奏したとは言わず、神に全面的に栄光を帰しています。こうしてヤコブの愛する妻ラケルが男の子を産んだことが一つのきっかけとなってヤコブは次の25節で、「私を去らせ、故郷の地に帰らせてください」とラバンに申し出て、帰郷の動きが始まって行くこととなります。

さて私たちが今日の箇所に見るのは何でしょうか。ここにはレアとラケルの意地をかけた出産競争が記されました。彼女たちは互いに嫉妬し合い、あの手この手を使ってわが子の数を増やそうとし、高ぶったり、相手の成功を見て落ち込んだりしました。そんな中、ヤコブが正しいリーダーシップを発揮しなかったこともあって家庭内は益々混乱し、收拾のつかない状態となりました。しかし私たちがここに見るべきは、そんな彼らのただ中に主はおられて、やがてのイスラエルの12部族の基礎を作っておられたということではないでしょうか。主はアブラハムに「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする」(12:2)と約束し、また「あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす」(22:17)と言われました。その約束を受け継いだイサクはヤコブを送り出す際、28章3節で「全能の神がおまえを祝福し、多くの子を与え、おまえを増やしてくださるよう。そして、おまえが多くの民の群れとなるように」と言いました。空の星や海辺の砂と比べればまだまだかけ離れていると言わざるを得ませんが、それでも一桁の子どもしか生まなかったアブラハムやイサクと比べれば神の約束はずっと成就に近づいています。アブ

ラハムから出た神の民となる息子は結局イサク一人であり、またイサクから出た神の民となる息子もヤコブだけでした。ところが今日の箇所においてヤコブからは何と 11 人の息子たちが生まれ、後にもう一人生まれることによって彼の代で 12 人となります。ここにおいて神の「民」という側面が顕著に表れ始めることとなったのです。神がそのようなみわざをこのヤコブの時に行われるとは人間的に考えられるでしょうか。ヤコブは罪を犯して実家にいられなくなり、異国の地へと逃亡して、そこでいわばしっぺ返しを受けている状況です。そして自分の家庭をコントロールできず、二人の妻たちは互いに張り合い、争っています。家庭の雰囲気はドロドロとして陰悪なものとなっており、後はいつ空中分解するかという感じです。ところが神はご自身の約束に真実であられました。ヤコブたちに何ら良いところが見られないのに、ご自身のみわざを進めておられました。ここに神の国が立てられるのはただ神の恵みによることがはっきり示されています。イスラエルの民は自分たちの過去を振り返った時に、そう思うでしょう。イスラエル 12 部族の成り立ちを思う時、彼らは決して胸を張ることはできません。そこにあったのは醜い争いであり、嫉妬合戦です。しかし神が恵みをもって導いてくださったことによって、この時にイスラエル 12 部族の基礎ができました。神の約束が大いに前進しました。神の恵みはこのように私たちの罪を越える偉大なものです。神は私たちの罪に打ち勝ってご自身の祝福の計画を実現してくださるのです。

私たちは今日の箇所を自分にも当てはめて思い巡らしたいと思います。自分のこれまでの生活を振り返ってどうでしょうか。私たちの人生にも神が今日の箇所と同じように働いてくださったことを私たちは見たことがあるでしょうか。あるいは今そのように働いてくださっていることを見ているでしょうか。今日こうして私たちが主への信仰に立って歩み続けることができているのは私の歩みが立派だったからなのでしょう。彼らよりましだったからなのでしょう。そうではないと思います。私たちが今日の箇所で見えた彼らと似た多くの姿を神の前にさらけ出して来たことと思います。怒ったり、嫉妬したり、野心を抱いたり、欲望に突き動かされたり、あるいは責任を放棄したり、愚かで罪深い行動を幾度となくとって来た者たちではないでしょうか。それによっていつすべてが終わりとなってもおかしくなかったと思います。一つ一つ取り上げて神に厳しく罰されるだけだったら、とても今日このように息をしていることさえできなかったと思います。私たちの過去の歩みにも今日の箇所に出て来た人たちのように振り返るなら恥を覚えずにいられない多くのことがあったのではな

いでしょうか。しかしそんな中で主は恵みをもってともにいてくださり、私たちの罪に打ち勝ち、私たちをなお保ち、今日もこうして救いの道を歩ませてくださっています。またこれからもそのように導いてくださると御言葉において約束くださっています。その憐れみと愛に満ちた神のお姿を今日の箇所を見て、自らのこととしてこの神をたたえ、賛美せぬにいられない者とされてこそ、ここを正しく読んだことになるのではないのでしょうか。

神はこんなヤコブとその家族を通してご自身の約束を実現し、なお彼を用いて行かれます。彼が立派な人だったから神は彼を選んで用いたのではありません。その逆です。神はただ恵みによって彼を導き、用いて行かれます。私たちもただ神の一方的な恵みによって今日このように支えられ、生かされていることを、今日の箇所に重ね合わせて見て、恵みの神を心からほめたたえたいと思います。そして心からの感謝をもって一層神の言葉に注意して聞き、神に従い、神の恵みに応える者とされて、この私の生活を通して神の栄光を現す者とさせていただく恵みの中を益々歩む者とされたいと思います。